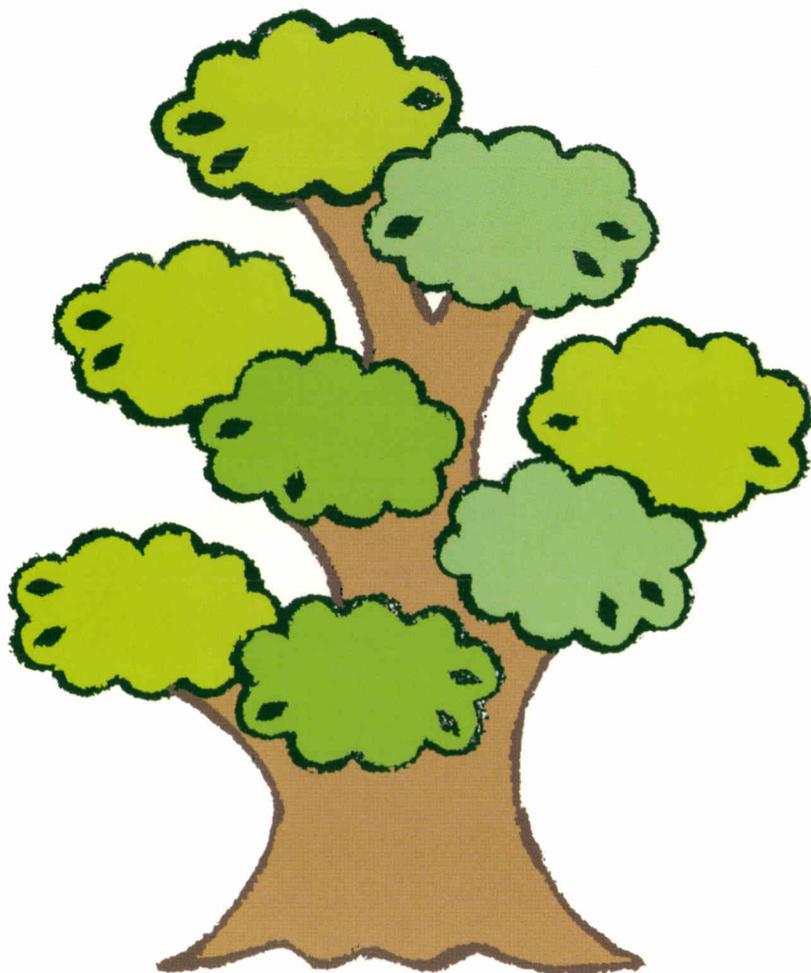


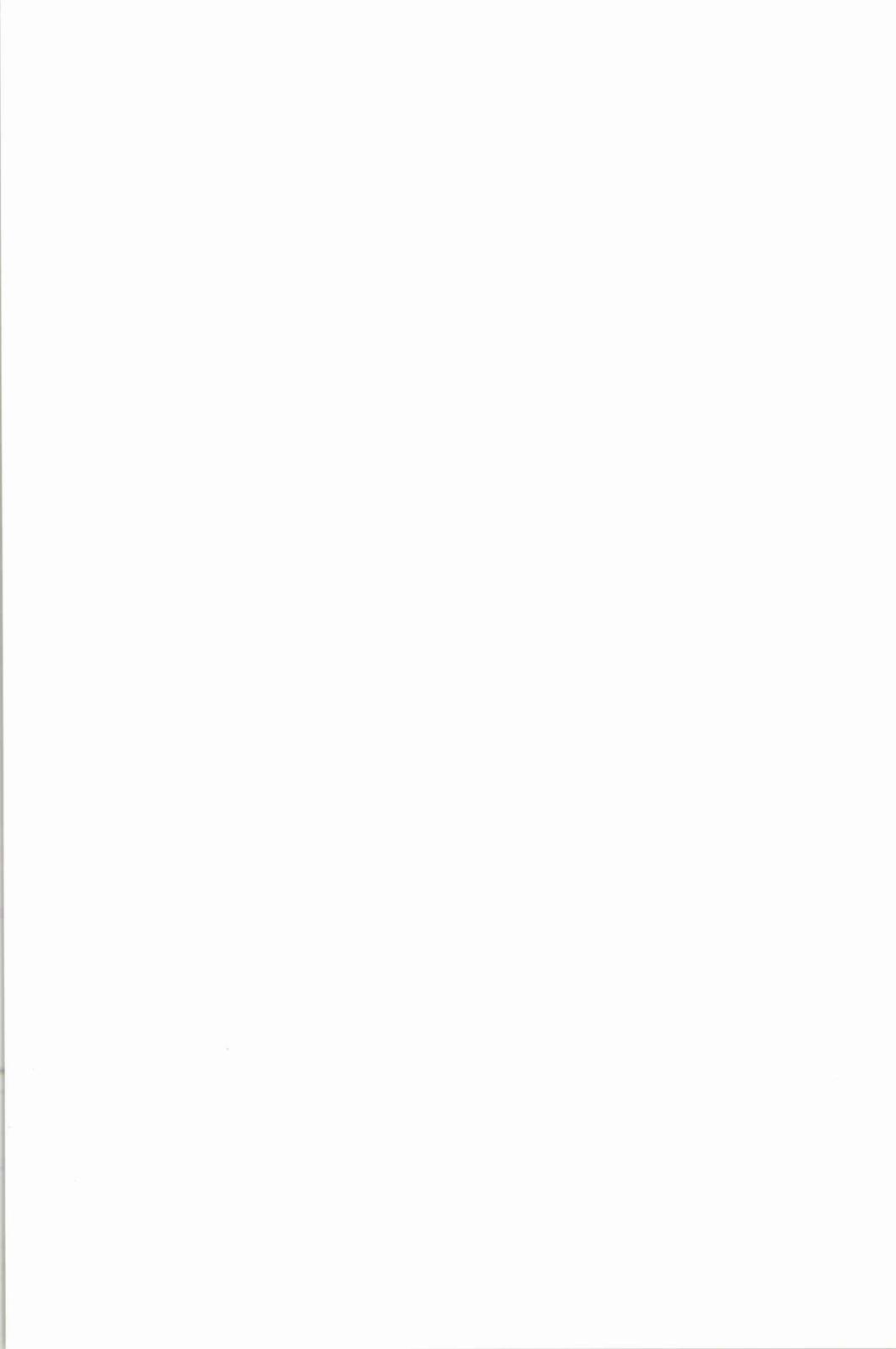
神の民
LAOS講座 第1号



礼拝の意味と実践



日本福音ルーテル教会



神の民 LAOSの樹

⑧「世界」の中のキリスト者

家庭と職業への召命
キリスト者と生命倫理
キリスト者と社会問題
人権・正義・平和・環境保全
情報化/グローバル化

⑦宣教と奉仕の理論と実際

教会は「宣教共同体」
神の民・「信徒と教職」
宣教と奉仕の具体像
牧会的カウンセリング
教会のディアコニア

⑥信仰継承

旧約聖書に見る信仰継承
小児洗礼と親・教保・教会の役割
堅信教育モデル
教育カリキュラム
祖先と死者の記念

③教理問答・諸信条

小教理問答書の展開
アウグスブルク信仰告白
ニケア信条と教会再一致
義認の教理とルーテル教会
日本の社会・文化の中で
信仰を告白すること

⑤教会の歴史

初代教会の歴史
宗教改革の展開
現代教会の流れ
JELCの歴史
自分の教会の歩み

②説教の聴き方・語り方

聖書日課（ペリコペ）の意味
説教の主題発見
説教の構成と表現
霊的な奉仕への召命
説教の展開としての牧会

④「聖書」とその読み方

「聖書」の読み方
救いの歴史の道筋
聖書の各書を読む
聖書とその周辺
「私」の聖書ノート

①礼拝の意味と実践

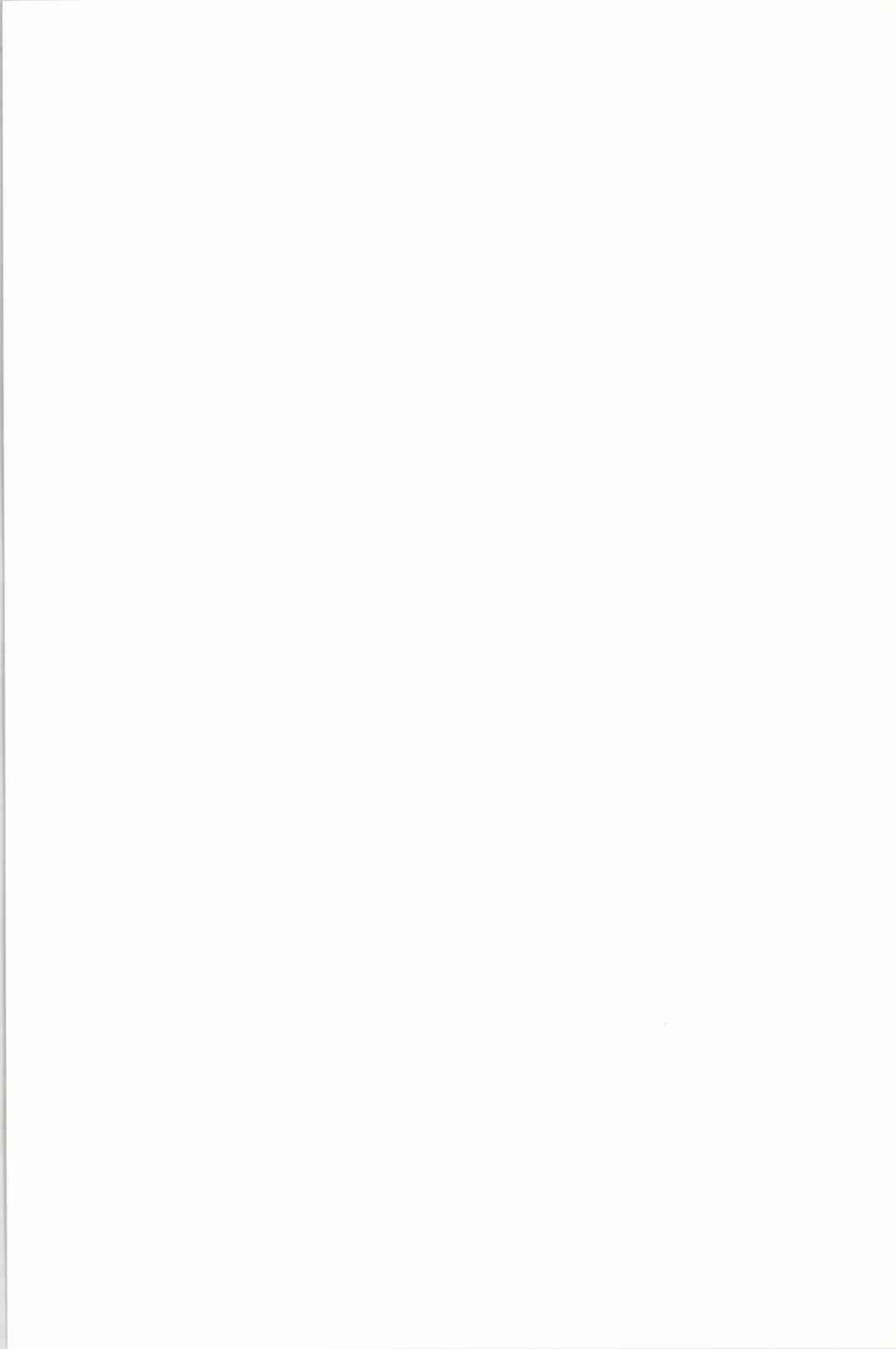
教会は「礼拝共同体」
教会の暦と礼拝
礼拝と音楽・会堂建築
式文の構成と会衆の参加
共同礼拝の司式者の役割

祈り・聖書

礼拝共同体

家庭と社会

宣教共同体



もくじ

★LAOS講座へのお招き	2
はじめに	4
第一回	
1. 礼拝する民	5
2. キリスト教会礼拝の原点	7
3. 教会の暦と礼拝	14
第二回	
4. 礼拝の空間	21
5. 音楽	24
第三回	
6. 式文	29
7. 司式者の役割	40
8. まとめ	45
★あとがき	47



LAOS 講座へのお招き

信徒としてよりよく生きるために共に成長していこう

信徒としての成長を

キリスト者として生きようと決心しました。それは、イエス・キリストを通して神さまから与えられた十字架と復活の福音を信じ、洗礼を受けて、教会の交わりの中に入れていただいたからです。求道者会、洗礼準備会での熱心な学び、兄弟姉妹に見守られながらの洗礼式でのあの感激を懐かしく思い出します。あの時言われた言葉、「洗礼はゴールではなく、スタートですよ」もまた忘れられません。しかし、その後の今日に至るまでの信仰の歩みを振り返るとき、聖書についても、信仰者としての教会と社会の中での生き方についても、もっともっと学びを深め、実践していきたいと思わないではいられません。—これは、多くの教会員の方々に共通する思いではないでしょうか。信徒としての成長、このことは自分自身にとっても、また教会にとっても、非常に大切なことです。

ルーテル教会としての決心

私たちが属する日本福音ルーテル教会（JELC）は、「福音に生き、社会に仕え、証しする」をスローガンとする、「JELC 宣教方策21」（パワーミッション21、略称 PM21）を2002年5月の総会で採択しました。福音に生かされて生きる。社会に仕え、そこに住む一人ひとりに仕える。十字架と復活の主イエス・キリストとその恵みとを大胆に証しする。そういう教会、そういう信徒になろうと教会全体で決意したのです。

全体教会の方策は、個々の教会で具体化されることではじめて実を結びますし、個々の教会でということは、一人ひとりの信徒が兄弟姉妹みなと共に手を携え、祈りを一つにしながら、実践していくことで本当の形をとります。「キリストがあなたがたの内に形づくられるまで」（ガラテヤ4:19）、その日までともどもに信徒として成長していきましょう。パウロはこうも言っています、「わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者になっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです」（フィリピ3:12）。

LAOS (ラオス) として

PM21の第二プロジェクト (P2) の目標は「証しし、奉仕する信徒になろう」です。そこで検討の結果、そのような信徒になっていくために、信徒としての受洗後の教育、生涯かけての成長のための教育のプログラムを用意しようということになりました。そして、それを「LAOS 講座」と名づけました。LAOS (ラオス)、それは、新約聖書が書かれたギリシャ語で「神の民」(ラオス・セウ) という言葉の「民」という言葉です。わたしたちは神の民、信仰の共同体、礼拝共同体、宣教共同体です。そのなくてはならない一員です。この講座の特徴は、個々の信徒の内的、霊的成長というのに留まらず、むしろ共同体の中で、共同体と共に成長する教会的信仰また生き方を目指している点です。LAOS という言葉から英語の信徒 laity という言葉もできたのですが、この講座は信徒こそ教会の中心であり、教会そのものだという考えに貫かれています。

証しし、奉仕する信徒になる

「証しし、奉仕する信徒」になっていくためには、知的な学習をすればそれで十分なわけではありません。この「LAOS 講座・第一期」でキリスト者としての基礎的な知識を習得したあと、さらに「第二期」で、より実践的な学びをして「証し」と「奉仕」を生きていく信徒へと成長していきましょう。そのためには、既存の書物から学ぶというだけでなく、実際にそのような生き方をしている兄弟姉妹からも積極的に学んでいきたいと願っています。

教会の輪の中で

「LAOS 講座」の第一期の学びは別掲の「LAOS の樹」にそのカリキュラムが載っています。その冊子を継続してご購入いただき、教会の諸集会で、学びを進めていってください。成果を分かち合い、そこで得たものを生活の中で生かし、足腰の強い信徒になっていきましょう。

2004年10月

日本福音ルーテル教会宣教方策21 (PM21)
プロジェクト2 (P2) 委員会

はじめに

暮らしの中には、日頃あまり意識しないで、ただ習慣的におこなっていることがいろいろあります。挨拶を交わすというのはその一つです。道で知り合いとばったり出会ったとき、頭を下げてお辞儀をするのが日本人。西洋人ならば握手をしたり抱擁したりします。しかしながら、ではなぜ日本人は頭を下げて、西洋の人たちは握手するのかなどということ、特に深く考えたりはしません。挨拶だけに限らず、そういったことがらは、案外身の回りにたくさんあるのではないのでしょうか。

クリスチャンにとって「礼拝」もその一つです。礼拝は、私たちにあってあまりにも当然でありすぎて、習慣的な行為です。「なぜ礼拝するのか」、「どういう意味があって礼拝の中でこういうことをするのか」といったような問いかけをほとんどすることなしに、普段、礼拝を守っているというのが通常ではないのでしょうか。

改めて言うまでもないことですが、**礼拝は信仰生活の原点**です。礼拝によって信仰は養われ、生涯にわたって神様とのつながりを保つことができます。そして原点であるがゆえに、そのような恵みのときを、ただ習慣的に守ることで、こと足りるとしてしまうのは、もったいないことです。

礼拝で行われている一つ一つの行為に込められた背景や歴史を考えることは、単におもしろいというだけでなく、過去の信仰者たちと現代の私たちとのつながりを発見することでもあります。そしてそれぞれに、どのような聖書的、神学的意味があるのかを理解することで、日曜ごとの礼拝体験そのものが生き生きと豊かになります。**礼拝の理解を深める**ことで、信仰生活に奥行きと厚みが増して、これまで以上に積極的に礼拝にあずかることができるようになるでしょう。

著者 浅野直樹（日吉教会牧師）

1. 礼拝する民

●礼拝する動物・人

そもそも人はなぜ礼拝するのでしょうか。なぜ祈るということをするのでしょうか。目に見えない存在を畏れ敬い絶えず意識する……。考えてみれば、これはとても不思議な行為です。人類学あるいは脳神経医学といった最先端科学は、人間と他の動物との境界線をしきりに探していますが、目に見えない存在に対して畏怖の念を抱くという礼拝行為に、境目を見出そうとしています。ここに「人間らしさ」の原点を見出しているようです。

創世記1:27

聖書は人間らしさについてこう語ります。「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。」人間が人間たるゆえん、それは私たちと神様の、他の生物にはない特別な関係にあるのです。この特別な関係こそが祈りであり、礼拝することに他ならないのです。神様を礼拝することは最も人間らしい行為なのです。「祈りに頼る人は自分に自信がない証拠」などとうそぶく人がいますが、決してそうではありません。**礼拝行為こそ人間の原点**です。

●神の奉仕・人間の奉仕

次に問わねばならないのは、「礼拝とは何か」です。礼拝しているとき、いったい何が起きているのでしょうか。これには、いろいろな学者がそれぞれの専門的立場から、いろいろなことを言っているので簡単に言うことはできません。しかし、ルーテル教会の祖、マルティン・ルターの教えによれば、礼拝において「私たちの愛する主ご自身が、その聖なるみ言葉を通して私たちに語られるということ、そしてまた今度は、

私たちが祈りと賛美の歌において主に語りかけるといふことの他には、何事も行われることはない」のです。もう一つのルターの言い方によると、**礼拝とは「神が人間に奉仕すること」であり、同時に「人間が神に奉仕すること」**です。事実、ドイツ語ではこの考え方がそのまま「礼拝」の呼び名となっています。

●民の代表

ところで、礼拝に出ている私たちは誰でしょう。礼拝行為の中心となるのが典礼ですが、この日本語があてがわれた聖書の言葉、ギリシャ語の「レイトゥルギア」(λειτουργία)には、「民衆の働き」という意味があります。ですから、少々おこがましい言い方ですが、礼拝に出ている私たちは、出ていない人々をも含めて全世界の民を代表して出席していることとなります。礼拝こそ、人間が為すべき原点だと認識して私たちがそれを守る、それは、私たち自身のためであるのみならず、そうしていない人々のためでもあるというのです。**礼拝出席者たちは、出席していない人たちのためにも、とりなしているのです。**



2. キリスト教会礼拝の原点

●ユダヤ教の礼拝

私たちの礼拝を考えるときに、うっかりすると見落としてしまいそうな大切な事実があります。それはキリスト教礼拝が、ユダヤ教の伝統から誕生し、今でもそれを本質的に持っているということです。礼拝を構成している要素はいくつかありますが、礼拝するとき必ず行われることは何かというと、**みことば**（聖書朗読とその解き明かし）、**祈り**、そして神への**賛美**（賛美歌を歌うことなど）です。聖書に出てくるユダヤ教の礼拝というと、まず思い浮かぶのがエルサレムの神殿ですが、そこでは、礼拝の中で祭司が祈り、犠牲をささげました。豎琴などの楽器にあわせて詩編を用いて歌っていました。例えば、よく知られている詩編の賛美は、こんなに活気に満ちています。

「全地よ、主に向かって喜びの叫びをあげよ。
歓声をあげ、喜び歌い、ほめ歌え。琴に合わせ
てほめ歌え。琴に合わせ、楽の音に合わせて。
ラツパを吹き、角笛を響かせて、王なる主の御
前に喜びの叫びをあげよ。」
詩編98編4—6

神殿が滅びても、ユダヤ人たちはシナゴグ（*συναγωγή*）と呼ばれる会堂で主を礼拝しました。これは神殿と違って各地にあり、ここに人々は集まり、聖書を読み、学び、そして安息日には礼拝を守りました。そして、イエスもシナゴグの礼拝に通っていました。さすがに熱心だったようで、聖書の解き明かしも担当していました。そのときの様子がルカ福音書に書いてあります。

「イエスはお育ちになったナザレに来て、いつものとおり安息日に会堂に入り、聖書を朗読しようとしてお立ちになった。預言者イザヤの巻物が渡され、お開きになると、次のように書いてある個所が目にとまった。」そしてイザヤ書を朗読し終えると、「イエスは巻物を巻き、係の者に返して席に座られた。会堂にいるすべての人の目がイエスに注がれていた。そこでイエスは、『この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した』と話し始められた。皆はイエスをほめ、その口から出る恵み深い言葉に驚いて言った。」

ルカ4:16-17

ルカ4:20-22

このように、ユダヤ教会堂での礼拝の主要素、みことばの朗読と解き明かし（説教）、祈り、賛美が、そのままキリスト教礼拝に取り入れられたことがわかります。

●エクレシアが礼拝する ここまで考えてきたことは、1) そもそも礼拝とは何か、2) キリスト教礼拝はどこから来たのか、ということでした。ここからは、キリスト教礼拝そのものについて考えていきましょう。

そこで、キリスト教礼拝の特徴を、とりあえず端的にキーワードで、わしづかみにしてみようと思います。まず思い浮かんでくる言葉は、エクレシア（*ἐκκλησία*）です。この言葉は、新約聖書の中に度々登場する「教会」を意味するギリシャ語です。原語の意味を紐解けば、「呼び集められた者たち」という意味になります。

元の意味からもわかるように、普段私たちがなにげなしに使っている「教会」という日本語

は、建物としての教会を表すだけでなく、「集う人々」のこともあつたのです。しかも、それが人々という複数であることにも注目する必要があります。そしてこのことは、キリスト教礼拝を考える上で、とても重要なことです。預言者として、あるいはメシアとして、神が指名してそれに応えた偉大な一人だけではありません。神の招きに聞き従つた人たちの群れ、それが教会です。礼拝する共同体、それがエクレシヤという教会の正体です。

エクレシヤ・教会が、礼拝する共同体だということ、どれほど強調しても、し過ぎということはありません。なぜならば、それが新約聖書に記録されている初代教会の人たちの姿そのものだったからです。エクレシヤという言葉は、福音書だとマタイ福音書に3回出てくるのですが（16：18、18：17）、頻繁に出てくるのは使徒言行録と書簡です。すなわちイエスが復活後、昇天した後の時代、人々はイエスを覚えるために集つたのです。そして礼拝したので、ここに、キリスト教会の礼拝の原点を見出したいのです。自分一人、家で聖書を読み祈ることは礼拝かと問われたら、本来の意味からいへば、それは違います。毎朝「聖書日課」に沿つて聖書を読み、祈る行為は奨励すべきですし、私たちの信仰を養つていくために欠かせないことです。しかし、これは礼拝とは区別をします。英語で「ディボーション devotion」という言葉で、こういった個人的礼拝のことを言い表しますが、日本語では、やはり広い意味で「祈り」と呼ぶのがいいでしょう。

● **コミュニオンの礼拝** キリスト教礼拝の特徴を表すもう一つのキー

ワードは、またまた聞き慣れないカタカナで、
コミュニオンです。エクレシアが新約聖書に根
ざすギリシャ語なのに対して、これは、これか
らの教会の在り方を示す英語です。辞書で調べ
ると「共有、交流、交際」といった一般的な意
味が出てきます。しかしこれは、キリスト教会
が好んで用いる言葉で、特に Holy Commu-
nion (あえて日本語にすれば「聖なる交わり」)
という、聖餐式のことを意味します。

キリスト教礼拝の原点を、さきほどエクレシ
アに求めましたが、この言葉はイエスが昇天し
たあとの弟子たちの集まりを指します。イエス
はもういない。しかし、体は見えなくても、こ
こに主イエスご自身が、ともにいらっしゃるこ
とを、礼拝を通して繰り返し繰り返し心に刻む
ために、彼らは集っていたのです。では、さら
に奥深くルーツを探し当てるために、弟子たち
がイエスと一緒に暮らしていたときまで時代を
遡ってみるとどうでしょうか。彼らの生活現場
に礼拝の原点を探ると、必ず突き当たるのが**最
後の晚餐**です。

「イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えて、
それを裂き、使徒たちに与えて言われた。『こ
れは、あなたがたのために与えられるわたしの
体である。わたしの記念としてこのように行い
なさい。』食事を終えてから、杯も同じように
して言われた。『この杯は、あなたがたのため
に流される、わたしの血による新しい契約であ
る。』」

ルカ22:19-20

「わたしの記念としてこのように行いなさい。」このイエスの命令からすべてが始まりま

した。イエス昇天後も、弟子たちはこの約束をずっと守ったのです。

〔(信者たちは) 毎日、ひたすら心を一つにして
神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜
びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美し
使徒言行録2:46-47 ていたので、民衆全体から好意を寄せられた。〕

この箇所をはじめ、使徒言行録には「**パンを裂く**」という表現が数回出てきますが(2:42、20:7、11、27:35)、これは弟子たちが、イエスを覚えるために命令に従って、共に集まっていたことを物語っています。そして、そこである「**聖なる交わりの食事会**」を再現していたのです。

上に引用した聖書箇所で、もう一つ興味深いことは、信者たちが二度礼拝していた事実です。「**神殿に参って**」礼拝し、それからまた帰ってきて「**家ごとに集まってパンを裂い**」ていました。ユダヤ教と二またをかけていたというのですが、結局のところ、神殿で礼拝しただけでは「**ともにいるイエス**」に出会うことはできなかったのでしょうか。だから、帰ってきてから、わざわざもう一度、イエスの命令に従ってパンを裂いたのです。この**パン裂きこそ、ともに**おられる**主イエスとの出会いの場であり、イエスを礼拝する原点**だったということに他ならないのです。イエスの現臨を体験するために、彼らはここに帰ったのです。そして、この**パン裂き**が、**今日のキリスト教会が守っている聖餐式**という**コミュニオンの原型**です。

このように、コミュニオンという言葉は、歴史的には最後の晩餐を指しつつ、今日的には、

礼拝する共同体としての教会を表現しています。ルーテル教会を世界規模で束ねている組織、ルーテル世界連盟（LWF）は、その名称に、まもなく Communion を付け加えます（The Lutheran World Federation—A Communion of Churches）。このことは、今後ルーテル教会が目指すべき教会論を指し示しているようで、象徴的といえます。

●ルーテル教会の礼拝

礼拝という人間的行為から、キリスト教会の礼拝へと視点を移してきたので、このあたりでもう一步絞り込んで、ルーテル教会の礼拝について述べていきます。ルーテル教会の信仰告白文書の一つ **アウグスブルク信仰告白** は、キリスト教会について次のように述べています。

唯一の聖なるキリスト教会は、つねに存在し、存続すべきである。それは、全信徒の集まりであって、その中で福音が純粋に説教され、聖礼典（サクラメント）が福音に従って与えられる。（第7条）

この文章によれば、教会とは、そこに信徒の集まりがあって、そこで福音が説教され、聖礼典、すなわち洗礼と聖餐が与えられるところということになります。**教会という礼拝共同体にとって、みことばと聖礼典がその本質**ということです。

ここで注目すべき点は、説教が聖礼典に先んじて語られ、それと等しく重んじられていることです。アウグスブルク信仰告白の弁証は、アウグスティヌスの言葉を引用して、聖礼典のことを「見えるみことば」と表現しています。そ

して、こう述べています。

(聖礼典の) 儀式は目で受け止められて、言わばみことばの像であつて、みことばがあらわすものと同じものをあらわすからである。だから、両者の効果は同一である。(弁証第13条)

聖礼典を「みことば」と呼んでいるのです。このことから、ルーテル教会では、説教を教会のしるしとして、聖礼典と同等に扱っていることがわかります。宗教改革以前では、聖礼典が教会のしるしとして孤高の存在でした。説教を語ることに聞くことは二の次でした。そもそも礼拝そのものが、すべてラテン語でしたから、みことばを語っても、ほとんどの人にとってみれば、それは仏教のお経同然で、ちんぷんかんぷん。何と云っても、毎週行われる聖餐式(ローマ・カトリック教会でいうところの聖体拝領)がミサそのものだったのです。ルターは、そういう状況を改革し、みことばの重要性を復活させ、聖餐式や洗礼と等しく**恵みの手段**と位置づけたのです。

以上のことからわかるように、ルーテル教会、ひいてはプロテスタント教会にとって、説教を語るというのは、聖礼典同様、教会を教会たらしめる決定的な行為です。全信徒祭司性の考え方に基づいて、信徒が説教する場合、このことは忘れてはならない点です。按手を受けた牧師たちも同様に、常々自分自身に言い聞かせていくべきでありましょう。

〈話し合いのために〉

みことばの説教や聖礼典のことを「恵みの手段」と呼ぶことがあります。その意味について考えてみましょう。

3. 教会の暦と礼拝

●教会暦の意味

礼拝は、教会暦に従って一年を巡ります。一年かかって、キリストの誕生から復活までの生涯とその後の出来事を、毎週の礼拝を通して経験します。神の救いの計画は、歴史という人間の時間軸で展開していきましたから、このように整えられた暦のおかげで、私たちの歴史の只中で神の救いが起こるといふ事実に思いを向けることができます。

●日曜日

教会暦が、長いキリスト教の歴史の中でどのように成立していったのかというのは、興味深いことです。礼拝についてその原点を探ってきたように、ここでも原点になるものは何かというと、日曜日につきあたります。すなわち、今でもそうであるように、礼拝を日曜日に守るといふ伝統です。その始まりは、やはり聖書にありました。

少し前にも述べたように、イエス昇天後の弟子たちは最初、神殿礼拝と家の礼拝の両方に出席していました。つまり、ユダヤ教の礼拝に出て、さらに復活のイエスを讃える礼拝（その後のキリスト教礼拝）を行っていたということです。時の経過とともに前者が減っていき、後者に取って代わることとなります。福音書によれば、**イエスが復活したのは「週の初めの日」**となっています。これは日曜日です。第一日というのは、創世記にあるように、神が天地創造を行った最初の日です。神は六日間かけて世界を創造し、七日目にお休みになりました。ユダヤ教徒はこの七日目を安息日として守ります。それが土曜日で、この安息日にユダヤ人は神を礼

拝します。そしてまた第一の日、日曜日がやってくるという繰り返しです。

使徒言行録20:7,
第一コリント16:2

初代教会の人々は、週の初めの日にイエスが復活したのを重んじて、第一の日、日曜日に礼拝をしていました。この習慣は、その後他の地域の教会でも受け入れられるようになり、321年には皇帝コンスタンティヌスが、ローマ帝国で日曜日を休日と定めることとなります。こうして日曜日の礼拝が確立しました。

●イースター (復活祭)

一週間という単位がこうして決まると、今度是一年のサイクルでキリストの出来事を記念することに関心が集まります。何を基準にしたかということ、やはりイエスの復活です。聖書によれば、イエスは過越の祭りのとき、弟子たちと最後の食事（過越の食事）をして、その直後に十字架刑に処せられ、三日後の日曜日に復活します。過越の祭りは、ユダヤの暦でニサンの月15日から始まります。この日は、私たちの用いているグレゴリオ暦では曜日が定まりませんが、だいたい4月頃に來ます。初期のローマの教会は、これを当時のユリウス暦にあてはめようと試みます。しかし、いかんせんユダヤ暦で過越祭がいつ頃になるのか、正確に知るすべがなく、イースターの日取りには、当初かなりばらつきがあったようです。これではいけないということで、325年に開かれた最初の世界公会議、ニケア会議で統一見解が公式に出ました。それは、**春分の日を過ぎて最初に来る満月の次の日曜日を復活日とする**という決定でした。今日の教会暦もこの決定に基づいています。典礼色は白です。

●クリスマス (降誕祭)

教会暦の中で、もう一つの重要な日といえばクリスマスです。イエスの誕生日が12月25日というのは、聖書のどこにも記録がありません。暦の決定がそんなに単純ではないことは、イースターの事情を考えればよくわかります。

クリスマスを12月25日に守ったという記録は、紀元4世紀のローマの文献にあり、これが最古です。ですから、ローマではそのころすでに、この日クリスマスを祝う習慣があったということです。なぜこの日にクリスマスをもってきたかについては、大きく分けて二つの説があります。そのうちよく知られている仮説を一つ紹介します。ローマでは、当時ミトラス教信仰が盛んで、時の皇帝アウレリウスは、ローマ暦で冬至にあたる12月25日を不滅の太陽神の誕生日としました(274年)。ローマの教会指導者たちは、いうまでもなく、そのような異教の祭りに信徒たちが出かけてしまうのを喜ぶはずがありません。そこでそれに対抗すべく、キリストこそまことの義の太陽であるとして、同じ12月25日をイエス・キリストの誕生日としました。仮説の域を超えませんが、興味深い話です。

クリスマスの典礼色は白です。

●その他の期節

イースターとクリスマスが決まりました。この二つをもとに、その他の祝祭日が割り当てられます。大きく分けて三期あります。

- ・待降節(アドベント)ー降誕節(クリスマス)
ー顕現節(エピファニー)
- ・四旬節(レント)ー聖週間(ホーリーウィーク)
ー復活節(イースター)
- ・聖霊降臨(ペンテコステ)以後

以下、それぞれの期節について簡単に説明します。

●待降節（アドベント） クリスマス（12月25日）までの4週間。王なるキリストの到来を待ち望む期節です。**教会暦はここから始まります。** 慎み深く節制してそのときを待つという意味で、典礼色は紫。西欧では最近、王なるキリストを強調して、青を用います。

●顕現節（エピファニー） イエス・キリストを通して、神がこの世に現れ出ることを祝う期節。1月6日を顕現日と固定しています。もともとは東方教会のクリスマスであり、同時にイエスの洗礼を記念する日でしたが、西方教会もこれを取り入れて、顕現主日の次の主日に「主の洗礼日」を守ります。顕現主日に、いわゆる「博士たち」占星術の学者が、イエスの誕生をお祝いに来るというクリスマスのお話を読むのは、東方教会のクリスマスの伝統を受け継いでいるからです。なお、通常「顕現主日」は1月6日以降の最初の日曜日に振り当てます。顕現節の最後の主日は「主の変容主日」です。典礼色は顕現の輝きを表す白です。

●四旬節（レント） イースターから遡って40日前（ただし日曜日は数えない）が四旬節の初日で、この日を灰の水曜日と呼びます。この日から、典礼色は慎みの色として紫を使います。この期節は、歴史的にはイースターに洗礼を控えた受洗者たちの準備期間でした。そして、最後の一週間が聖週間、いわゆる受難週です。この40日間は、キリストの試練と受難を覚えるときであると同時に、洗礼を受けた一人ひとりが自分自身の洗礼

式を振り返り、キリスト者としての生き方を、もう一度新たにするためでもあります。

●聖週間

伝統的に「枝の主日」から始まります。イエスがエルサレムに入城して、民衆から枝を打ち鳴らして歓呼の叫びで迎え入れられるところから、十字架への道が始まるからです。この日は、「受難主日」としての聖書日課も用意されていて、キリストの受難物語全部が聖書朗読箇所になっています。いうまでもなく、この一週間の主題が、キリストの十字架だからです。枝の主日として礼拝し、次週イースターを迎えるとする、日曜日だけに限って言えば、十字架がまったく出てこないことになり、受難を覚える特別な一週間の意味が薄らいでしまいます。この週の木曜日には、イエスが弟子たちと最後の食事をとるときに彼らの足を洗ったことを記念する礼拝が行われます（聖木曜日）。そして翌日の金曜日には、十字架につけられたキリストとその死を覚えて礼拝します（聖金曜日）。

ルーテル教会式文にはありませんが、伝統的には大切な礼拝がこのあともう一つ行われます。聖土曜日の礼拝で、その日の夕方からイースターの朝にかけて行われるので「イースター徹夜祭」ともいいます。洗礼に向けて準備してきた人たちが、いよいよこのとき洗礼を受け、イースターの朝に初陪餐にあずかります。

聖週間の典礼色は、慎みを表す紫、もしくはキリストの血を表す深紅が使われます。また、洗足の木曜日の礼拝終了時には、翌日の磔刑に備えて聖壇布を剥ぎ、聖具をすべて片づけるという習慣もあります。

●聖霊降臨祭 (ペンテコステ)

復活のイエスは40日間弟子たちとともに過ごし、その後昇天します。そして、その10日後の五旬祭に、弟子たちは聖霊を受けます。この出来事を記念する祝祭日です。主イエスの復活を祝い喜ぶというイースターの期節は、この日までの50日間です。聖霊降臨日は、その出来事の特異性ゆえにイースターと切り離して考えたくなりますが、むしろこの日は、復活節の最終日とするのが伝統的な理解です。イースターの50日目、それがペンテコステです。

典礼色は聖霊の炎の色、赤です。

●三位一体主日

ペンテコステ後の最初の日曜日に割り当てられている名称です。プロテスタントとカトリック教会双方が、この主日を受け入れています。三位一体の教理が確立したことを背景にこの日が設定されているようですが、実際には歴史は浅く、中世からの伝統です。父、子、そして聖霊と三役そろう踏みしたので、ここらあたりでお祝いしようということになったのかもしれない。

典礼色は白が用いられます。

●聖霊降臨後主日

かつては三位一体後主日と呼ばれましたが、イースター、クリスマスと並んで、もう一つの三大祝祭日、聖霊降臨祭にちなんで、こう呼ぶならわしになってきました。ここから待降節までおよそ半年間、教会暦の中で最も長い期節が続きます。比較的自由度が高い期節であることから、この時期に各教会は独自の暦を入れたりしています。例えばルーテル教会では、「平和主日」や「宗教改革主日」、「全聖徒主日」などが入っています。またルーテル教会では、特定

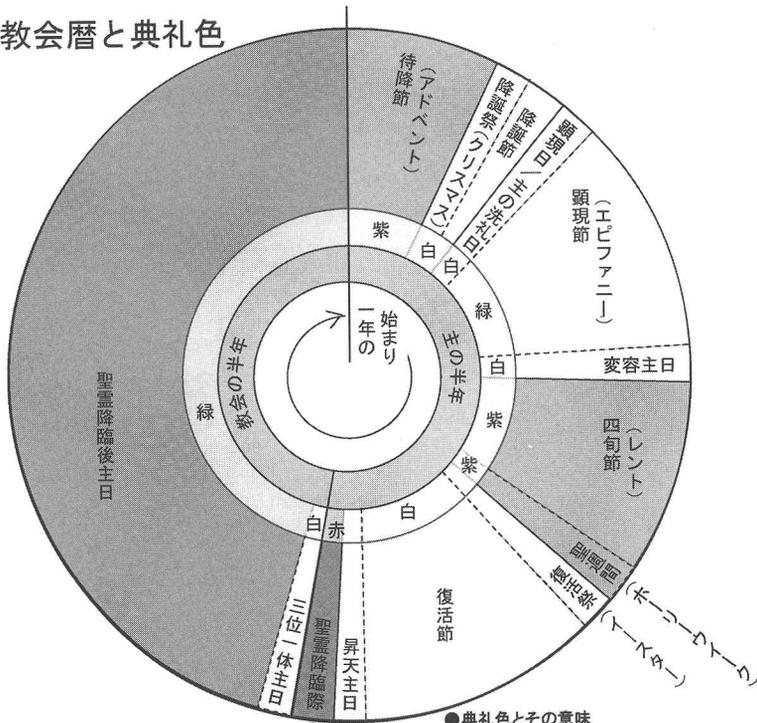
の諸聖徒の記念日を設けていますが、日本では一般的ではありません。

典礼色は信仰の希望と成長を意味する緑です。

〈話し合いのために〉

私たちは、キリスト教の暦と同時に、日本の暦をも生きていますので、二つの暦を生きるという難しさがあります。実際、どのような現実があり、どうやりくりしているのか、話し合ってみましょう。

教会暦と典礼色



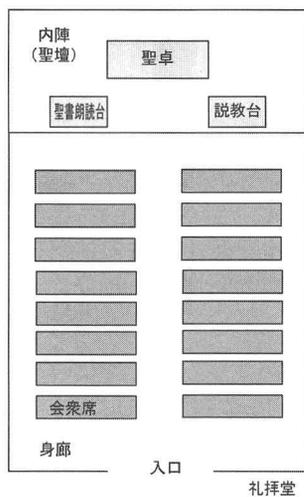
● 典礼色とその意味

待降節	紫	懐み深く節制してそのときを待つ
降誕節	白	懐みの輝き
顕現節	白	懐みの色
四旬節	紫	懐みの色
聖週間	紫	懐みの色
復活節	白	懐みの色
聖霊降臨祭	白赤	聖霊の炎の色
三位一体主日	白	懐みの色
聖霊降臨後主日	緑	信仰の希望と成長

4. 礼拝の空間

礼拝する場所といえどももちろん礼拝堂（会堂）です。ここまで礼拝の本質についていろいろ述べてきましたが、私たちにとって礼拝する「器」は、やはり無視できません。新しい教会を建築することになったとき、信徒は祈りと財を結集し、どんな空間にするか、じっくりと時間をかけて話し合いながら決めていきます。新会堂建築は、信徒一同が総力を結集してこそ可能であり、そのために、信徒は労を惜しまないものです。どんな礼拝の空間にするかが、そこで礼拝する会衆の信仰を表明すると言っても言い過ぎではないでしょう。

●礼拝堂の形



聖書朗読台と説教台の配置は、教会によって、左右逆の場合や片方で兼用の場合もあります。

最も一般的な礼拝堂の形というと縦長の長方形でしょう。入り口が最後部にあつて、会衆席（身廊）がずっと並び、一番奥の内陣と呼ばれる部分（ルーテル教会では一般に聖壇）に、典礼の中心部分を占める聖卓や説教台があります。例えてみれば、それは、後方の観客席と前方のステージという劇場の構成と同じです。聖餐式や説教がショーだという意味ではもちろんありませんが、この構造を、当たり前のこととして無思慮に取り入れてしまう必要もないわけです。少し遅れてきて会堂の後方に座った人と、礼拝の中心ともいえる聖卓の距離は、大きな教会であればかなりのものです。あるいはそれが、観客席と舞台のように、観る人と演じる人を区別してしまうようであるならば、本来礼拝堂というのはそういうものではないので、その礼拝堂には問題があると言わざるを得ないでしょう。縦長の長方形は、古代ローマ教会の建

築様式をほぼそのまま採用したもので、これはローマ帝国の裁判所の建築様式でバシリカという形式を模しています。

しかし、礼拝堂の形はこれだけではありません。東方正教会は、西方教会の影響をほとんど受けずに独自に発展しましたし、西方教会でも宗教改革以降、特にいろんな形をした会堂建築の試みがなされました。丸形、正方形、八角形、十字形等々。私たちが当然のように思っている長方形のバシリカ様式が抱える構造上の問題、すなわち礼拝の中心部から会衆までの隔たり感を減らす試みというのは、今日でも建築上重要な視点です。あるいは、礼拝堂で行われる典礼の中心が何かをしっかりと見極めて、それが司式者と会衆全体を包み込んだ中心として、神学的にも空間的にも位置しているかどうかは、考慮する必要があります。

● 典礼祭具

礼拝堂を構成するのはその空間だけでなく、典礼に不可欠ないくつかの祭具があります。ルーテル教会やカトリック教会、聖公会などは内陣の中央には必ず**主の食卓（聖卓）**があり、礼拝行為の中心が何かを位置そのものが示しているといえます。

聖書朗読台や**説教台**は、ルーテル教会では内陣の左右にあります。それに対して、カルヴァンの流れを汲むその他の多くのプロテスタント教会では、中央に講壇だけがあります。聖卓のない教会もたくさんあります。宗教改革によってカトリック的な要素を廃して、みことばに集中しようというカルヴァン派の神学をこのあたりに見ることができます。

典礼の中心を示すもう一つの祭具は**洗礼盤**で

す。これも歴史と神学の違いにより大きな影響を受けて、位置や形態は教派によってさまざまです。洗礼は教会への入信儀礼という神学的理解から、洗礼盤を会堂の入り口に置いている教会があります。あるいは、会堂とは別棟にしているところもあります。洗礼志願者たちがめざす初陪餐のための聖卓は、洗礼を受けることで初めて見えてくるのです。

洗礼についての神学の違いで、洗礼盤がない教会もあります。バプテスト教会のように全浸礼しか認めない教会には、洗礼槽が用意してあります。ただし、「**洗礼は一つ**」ですから、こういった教派的違いを克服するために、エキュメニカルな取り組みも行われています。その結果、しるしとしての水をできるだけふんだんに使うことの意義が強調されており、従来もっぱら滴礼や灌礼を実施していた教会などでも、近年洗礼槽を設けている教会も増えています。

エフェソ4:5

それが、盤であろうと槽であろうと、あるいは内陣にあらうと入り口にあらうと、洗礼を受ける空間は受洗者だけの空間ではありません。なぜなら、一人の人間の洗礼は、その人だけの喜びの出来事ではなく、そこに連なる全会衆の出来事だからです。**洗礼による一人の生命の生まれ変わりはすべての人の喜び**でもあるので、受洗の現場に全会衆が立ち会えるようにする配慮が大切です。



5. 音楽

キリスト教礼拝における音楽の意義というのは、たとえ中心的役割を持たないとしても、礼拝の豊かさを生かすも殺すも音楽次第とって良いほどに、大きいのではないのでしょうか。

ルーテル教会の礼拝式文は、その多くの部分を歌うことで進みますから、礼拝を音楽と切り離して考えることはできません。宗教改革の時代、ツヴィングリは、聖書に忠実であろうとするあまりに礼拝音楽を一切禁止し、チューリッヒの市議会は、パイプオルガン破壊条例を出しました。カルヴァンは、ツヴィングリほど過激ではありませんでしたが、礼拝での楽器の使用、聖歌隊、典礼用音楽を廃して、詩編歌だけを採用しました。その点ルターはというと、いつも良いものは良いと容認していく寛容さがありまして、「音楽は神からの賜物であって、実に素晴らしい」、あるいは「音楽以上に価値あるものは、みことばぐらいしか見あたらない」と言っているほど音楽愛好家だったのです。ですから、礼拝の中にも積極的に音楽的要素を取り入れましたし、彼自身30曲以上賛美歌を作曲しました。そういった背景があったからこそ、**J.S.バッハのような優れた教会音楽家**を、ルーテル教会から輩出することになったのではないのでしょうか。

●賛美歌の貢献

音楽の持ち味が最も豊かに発揮されるのは、会衆一同が賛美歌を歌うときではないでしょうか。教会に詰めかけたキリスト者一人ひとり、神への感謝と賛美を礼拝の中で表現します。各個人の神様への思いと感情はそれぞれ違

っていますが、そのとき、もし各自が自分の気持ちを自由に声に出し、歓声をあげたりすれば、それはざわめきに聞こえるだけで、会堂内には不調和な空気が漂ってしまいます。音楽が持つ音色とリズム、そしてハーモニーは、私たちの勝手な気持ちや感情を、人間的な理解を超えた方法で一つにしてくれます。そして、美しく調和がとれた喜びと感謝の声となって神様に向けられます。あるいは、悲しみと悔い改めの祈りとなって天に届きます。音楽なくして、それは成し得ないことです。

教会音楽は、礼拝の中でいろんな用いられ方があります。オルガンによる奏楽、聖歌隊、あるいは独唱とか器楽演奏による賛美もあるでしょう。どれをとっても神様からいただいた賜物を十分に用いて、より美しく、そしてときにより精巧に、神を誉め称えてくれます。

しかし、なんといっても**会衆が賛美歌を歌う声に優る賛美はありません**。礼拝という空間が、一人の人間のためでなく、信仰によって共に生きる者たちが集い、心を一つにして神に祈るためにあることを思うと、神様が最も耳を傾けてくださるのは、全員の歌声ではないでしょうか。音楽は、信仰者が全員一緒になって神様を賛美するためにあると言っても良いと思うのです。

またルターは、会衆が歌う賛美歌のことを「**会衆がおこなう説教**」と呼びました。賛美歌の歌詞が、歌う一人ひとりにみことばを届けてくれます。説教を聞いてもすぐ忘れるし、聖句を暗唱しようと思ってもなかなかできませんが、メロディにのせてこれを歌うと、不思議と覚えやすくなります。著名な名説教家のお話よ

りも、ひょっとして賛美歌こそ最も心に残る説教なのかもしれません。

ルターの賛辞を紹介するまでもなく、音楽は神様が創造し、人間に与えてくださったこの上ない表現手段です。

● 賛美歌集

私たちの教会で用いられている賛美歌は「教会讃美歌」と「讃美歌」があります。「讃美歌」は初版が1903年に出たあと、1931年、1954年と改訂を重ね、54年版が広く多くの教派で用いられるようになりました。やがてルーテル教会もこれを採用し、今日でも根強い人気があります（「讃美歌」を採用するまでは「あがないの歌」という独自の賛美歌集もあったようです）。1969年のアスマラ宣言を経てルーテル教会が自給路線を歩み始めたころ、**ルーテル教会独自の賛美歌集**が刊行されました。1974年のことです。それまで数十年かけて準備されてきた「**教会讃美歌**」が誕生します。54年版の「讃美歌」の曲を収録するとともに、ドイツのコラールやルーテル教会を国教とする北欧の賛美歌、さらには、ラテン、ギリシャの古い伝統を受け継ぐ曲も取り入れているのが特徴です。また賛美歌は、礼拝の中で歌われる会衆歌であるために、声をそろえて斉唱することを念頭に編纂されたことも特筆すべきです。

その後、日本の賛美歌事情は新たな時代を迎え、近年各教派が次々と改訂版を刊行しています。日本基督教団は、54年版「讃美歌」を大改訂することになり、1997年2月、新たに「讃美歌21」を刊行しました。この賛美歌集の誕生は他教派にも影響を与え、日本福音ルーテル教会も、収録している30曲の「讃美歌」の版權の事

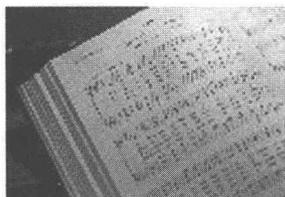
情から、2000年2月に「教会讃美歌」を部分改訂しました。これまで、日本の賛美歌集の代名詞的存在だった54年版「讃美歌」の時代も終わりを告げようとしています。

● 賛美歌を選ぶ

会衆が歌う賛美歌が礼拝音楽の中心的存在であるということは、会衆賛美歌の用い方が問われているということです。音楽は礼拝を豊かにしますが、そのためには、**賛美歌の用い方、選び方を工夫する努力は欠かせません**。会衆が歌いたい賛美歌は、やはり入れたいでしょう。かといって、いつも同じ賛美歌ばかりでは変化に乏しくなります。説教者が会衆に歌ってもらいたい賛美歌もあります。期節に合った賛美歌も選びたいでしょう。しかし、説教のテーマにあっているからといって説教者が選んでも、とても難しいメロディだったり、奏楽者がまだ弾き慣れていない場合もあります。歌ったことのない新しい賛美歌にもぜひチャレンジしてもらいたいものです。そういう意味で、**賛美歌は会衆が選び、奏楽者が選び、また説教者が選んで決めるべき**ではないでしょうか。牧師が一人で選ぶという性質のものではありません。このようにして、会衆が礼拝づくりの段階から参与することが可能です。

さきほど、宗教改革者たちが音楽をどう観ていたかについて述べました。ルター派の伝統の中に立つとき、音楽のすばらしさを、ルターが諸手を挙げて歓迎したことは喜ぶべきですが、同時に、他の宗教改革者たちが慎重にならざるをえなかった点へも注意を払うべきでしょう。と言うのは、そのあまりの素晴らしさゆえに、音楽は「魔物」だからです。礼拝の中で音楽が

用いられるとき、音楽が、ときにみことばを圧倒してしまうことはないでしょうか。極端な言い方かもしれませんが、音に酔いしれてしまって、みことばがかき消されてしまうことだって起こり得ます。礼拝における音楽は、いつもみことばに奉仕する立場にあることを忘れてはなりません。



6. 式文

それでは、私たちが普段使っている「ルーテル教会式文」を見ていきましょう。この式文は、1996年に、日本福音ルーテル教会と日本ルーテル教団が共同で編纂し、今日両教会の標準式文になっています。礼拝式そのものだけでなく、結婚式や葬儀、特別な諸行事の式次第や祈りなども含まれている包括的なものとなっています。

ルーテル教会式文の特徴は、やはりアウグスブルク信仰告白第7条に集約されています。

唯一の聖なるキリスト教会は、つねに存在し、存続すべきである。それは、全信徒の集まりであって、その中で福音が純粹に説教され、聖礼典(サクラメント)が福音に従って与えられる。

この告白文は、**礼拝の本質は福音の説教と聖礼典**であるということを述べています。

●聖礼典と 「アディアフォラ」

キリスト教の礼拝式は、教派によってずいぶん違いがあります。宗教改革から生まれたプロテスタント教会の中には、カトリック的伝統を排除して、形式にとらわれない、全く自由な礼拝スタイルの教会があります。その一方で、カトリック教会や聖公会では、伝統的な典礼を重んじており、礼拝式文は始めから終わりまで定まった形式で貫かれ、ほとんど自由はありません。ルーテル教会は、いわば、この両極の中間に位置しています。伝統的な典礼を受け入れ、それを重んじつつも、本質とそうでないも

のを明確に区別しています。ここまででお分りの通り、ルーテル教会において、礼拝の本質とは、説教と聖礼典（洗礼と聖餐）のことです。そして、それ以外のものは、「神のことはにおいて、命じられも禁じられもしないで、単に良い秩序と安寧のために教会に取り入れられた儀式」（和協信条・梗概・第10条）ということになります。このどちらでも良いことがらを、**アディアフォラ**といいます。この二つを明確に区別していることが、ルーテル教会の礼拝の大きな特徴といえます。

そうはいうものの、アディアフォラを濫用し、新奇な要素を無分別に取り入れてしまうようなことは厳に慎むべきでしょう。礼拝は公同的であるという基本的性質を考慮すれば、一人の牧師や信徒の思いつきや発想で、アディアフォラの部分を自由に変えて良いということにはなりません。

ルーテル教会では、聖餐式を説教と並んで礼拝の本質としているのですが、実際はどうかというと、日本の教会の現状を見る限り（日本だけでもないようですが）、そういう扱いになっていないと言わざるを得ません。多くの教会では、**聖餐式**は毎月第一主日の礼拝においてのみ実施しています。年に数回というプロテスタント教会よりは「ちゃんとしている」のかもしれませんが、これが本質であることを考えると、**回数を増やす**ことを考えても良いのではないのでしょうか。聖餐式の回数が増えると、その分、パンとぶどう酒のありがたみが減るという意見も聞きますが、本当にそうなのでしょう。いづれにしても、これは、宗教改革以後のプロテスタント教会が辿った歴史と深い関係がありま

す。カトリック教会に対する批判、みことばの重視、さらには宗教改革以後、台頭してくる啓蒙主義の影響のもと、今日のプロテスタント教会があります。神学におかしいからと、宗教改革以後の伝統と歴史を一刀両断にしてしまうことが良いこととは思えません。今後、私たちの教会でも、このことは繰り返し議論していく必要があるでしょう。

●ルーテル教会式文

ルーテル教会式文は礼拝式を五つの部門に区分しています。

- (1) 開会の部
- (2) みことばの部
- (3) 奉献の部
- (4) 聖餐の部
- (5) 派遣の部

礼拝は神との交わりです。ですから礼拝は、神の会衆への語りかけと、それに対して、会衆が祈りと賛美で応答するという形式で進みます。

神との交わりである礼拝の中心は、前半が「みことばの部」であり、後半部が「聖餐の部」です。特に「聖餐の部」では、パンとぶどう酒のうちに現れた主イエスとの交わりが与えられます。

五部門に別れた礼拝式のもう一つの大切な要素は、**会衆一人ひとりの互いの交わり**です。礼拝に集った一人ひとりが、人間同士互いに出会い、言葉を交わします。

(1) 開会の部

神に呼び集められた者たちが、神をあがめる目的で集い、ここに礼拝共同体ができあがったことを確認します。

●初めの歌

賛美歌や詩編唱を歌います。その日の礼拝の目的や主題を示す歌が選ばれます。

●み名による祝福

これから始まる礼拝が、三位一体の神への礼拝であることを、司式者が宣言します。

●罪の告白の勧め・
罪の告白・
赦しの祈願祝福

罪の告白は、元来司式者が礼拝準備段階で個人的に祈っていた部分です。しかし、宗教改革以後、ルター派教会で採用されるようになりました。

罪の告白をした会衆は、当然のこと神の赦しを願います。以前の式文では、ここを「赦しの宣言」と称していましたが、ルーテル教会式文では「赦しの祈願祝福」となっています。これは、赦しがみことばと聖餐を通して与えられるという神学的理解を重視することになったためです。「ここで罪を告白し、司式者から赦しの言葉を聞いたから、これで罪が赦され、神様に面と向かって礼拝できるようになった」と考えたいところですが、そうではありません。むしろここで、私たち自身の罪を再認識して礼拝に臨むという心構えをします。

●キリエ (主よ)

「主よ、あわれんでください」(ギリシャ語でキリエ エレイソン)を繰り返します。罪の告白同様、ここでも、罪を悔い神の憐れみを求める祈りをします。

●グロリア (栄光)

もとは東方正教会の賛美で、6世紀にローマ・カトリック教会でも使われるようになりました。父、御子イエス・キリスト、そして聖霊の神、それぞれの位格を賛美することで、三位一体の神を讃える形式となっています。

(2) みことばの部

●祝福の挨拶

ここから、みことばの部になります。部門が変わるために、ここで祝福の挨拶を交わします。これは、部門が変わるたびにこのあとも出てきますが、数人で司式を担当するならともかく、通常は司式を一人の人が受け持つのがほとんどですので、その場合はこの部分を省くこともできます。

●特別の祈り

開会の部で、提示されたその日の礼拝の主題に基づいて祈ります。そういう意味では、開会の部の締めくくりともいえますが、これから聴くことになるみことばとのつながりをも示しているのです、みことばの部に入っています。

●旧約聖書、使徒書の朗読

ルーテル教会では、主日礼拝の聖書箇所を説教者が自由に選択するのではなく、聖書日課に基づいて割り当てられた箇所を読みます。そして、旧約、使徒書、福音書それぞれから、毎週の礼拝でみことばを聴きます。

旧約聖書の朗読箇所は、通常その日の福音書と関連したところが読まれます。神の救いの出来事は、すでに旧約時代から始まっていることを、こうして告知します。

使徒書および黙示録は、第二朗読で取り上げます。使徒書には、初代教会の様子が具体的に描かれていて、それを読み、聞くことで、あたかもパウロたちが今日の教会にも書簡を通して語りかけているようです。

●ハレルヤ唱または詠唱

ハレルヤと主を讃えることで、この直後に聴く福音書のキリストと彼の言葉を迎えます。

●福音書の朗読

聖書朗読のクライマックスがここにやってきます。主イエス・キリストが、聖書のみことばとして、ここで会衆に現臨します。**会衆は、それを「聴く」ことによって体験します。**パウロは言っています、「実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです。」

ローマ10:17

●みことばの歌

その日の礼拝の中心主題を示す賛美歌をここで歌います。

●説教

その日のために選ばれた聖書箇所に基づいて、主のみことばが、今日の状況の中で語られます。

●感謝の歌

聖書朗読と説教を通して福音をいただいた感謝を歌い、喜びとともに神を賛美します。

●信仰の告白

ルーテル教会式文では、みことばへの応答として信仰を告白します。

信仰の告白の由来は洗礼式です。受洗志願した人たちが、洗礼を受ける前に告白していた言葉が、5世紀頃から礼拝の中でも唱えられるようになりました。ルーテル教会式文のニケヤ信条では、告白文の主語が「私」になっていますが、ギリシャ語原文だと「私たち」となっています。礼拝の公同性、あるいは礼拝共同体としての教会であることを考えると、ここは原文通り「私たち」のほうが適切という意見があります。

ルーテル教会式文には、使徒信条とニケヤ信条の使い分けについて説明があります。そして、その規定は、ゆるやかな表現になっています。

す。しかしながらその一方で、その日の礼拝がどのような礼拝であっても、洗礼や堅信礼が行われるときには使徒信条を用いるべしという強い主張もあります。これは、使徒信条が、初期の教会での洗礼式で使われた信仰告白文をもとに成り立っているからです。

ところで、司式者は、どこを向いてこれを唱えれば良いのか迷うところです。というのは、信仰告白は、神へと向かう告白という意味では祈りですが、もう一つの意義として、世界へ向けての信仰宣言でもあるからです。ルーテル教会式文にも、はっきりとした規定はありません。

(3) 奉献の部

●奉献と奉献唱

ここで献金を、そして場合によっては聖餐のためのパンとぶどう酒をささげます。献金は、私自身を神にささげますという気持ちを象徴するささげものです。なお、ささげられた献金を聖壇上に置くのは、それが主の食卓であることを考えると、意味あることとはいえません。

パンとぶどう酒をここでささげるのは、人間の手で作られたこの食物を神がご自身のご用に用いてくださることを覚えるためです。設定辞の文言でいうならば、「主イエス・キリストは、……パンを取り、感謝し、これを裂き、弟子たちに与えて」という一連の行為の中のパンとぶどう酒を「取る」という行為に該当します。

●奉献唱

奉献のとき一緒に歌う奉献唱は、詩編51編です。これは、ダビデがバト・シェバと通じてその罪を預言者ナタンに指摘されたとき、「私は主の前に罪をおかした」と告白して打ちひしが

れるダビデが歌った詩です。犯した罪を告白し、悔い改めて自分自身を神にささげようとするダビデの思いが、そのまま礼拝する私たちの思いであることを表しています。

●奉献の祈り

詩編51編のダビデの心境でささげものをした会衆の気持ちを、ここでもう一度神に申し述べます。奉献唱と意味合いが似ているので、いささか重複的ではありますが、信徒が砕かれた心を自分の言葉で自由に表明できる部分でもあり、有意義です。

(4) 聖餐の部

●聖餐の歌

聖餐をテーマにした賛美歌を歌います。この間に司式者は、聖餐式の準備を整えます。

●序詞

ここから、聖餐式の中核をなす「感謝（ユウカリスト）の祈り」が始まります。司式者は、ここから、感謝の祈りをささげることを示し、 sacramentの秘義へと向かう参加者の心を整えます。

●その日の序詞

イエス・キリストによって完成した救いの感謝を、父なる神に向かって祈ります。この部分は、言辞が教会暦によって変化しますので、「その日の序詞」となっています。

●サンクトゥス

聖餐を感謝する賛美を歌います。前半部の「グロリア」に相当する部分です。預言者イザヤが神殿で見た幻の中で、天使が唱えた歌を使って賛美します。これから起こる聖餐の神秘が、イザヤの体験を通して具現します。

●設定

元となっている聖書箇所は、ルカ福音書22章と第一コリント11章のパウロによる主の晩餐の記事です。ここに記されたキリストの命令に従って、パンとぶどう酒が祝福されます。

ルーテル教会式文には、設定辞は3種類紹介してあります。多くの教会では(一)を用いているのが現状ではないかと思えます。(一)には、キリストによる設定の言葉だけしかありません。設定の言葉だけが使われるようになったのは、ルターが作った式文がそうだったからです。これは、ルターが、聖餐式における犠牲的表現をローマ典礼式文から取り除くために、感謝の祈りの主要部分をもひとまとめにして削除してしまったからです。

しかしながら、聖餐式が神への感謝(ユカリスト)の祈りから成り立っていることを考えると、ローマ典礼に盛り込まれている神の救いのみわざに対する感謝の言葉、たとえば創造のみわざ、アブラハムの祝福、エジプトからの救済といった**歴史の中の出来事を一つ一つ数え上げて感謝することは、とても意味のあること**ではないでしょうか。そしてなんとと言っても、イエスご自身、最後の晩餐でパンとぶどう酒を祝福して祈りをささげたとき、伝統に従ってこのように祈ったであらう。

そういう意味で(三)は、神の救いの歴史を振り返りつつ、さらにはローマ典礼文に則して、過去に起こった主のみわざを今ここに想い起こし(アナムネーシス)、聖霊によるパンとぶどう酒の祝福を祈っている(エピクレーシス)ので、内容的にこれがもっともふさわしいといえるでしょう。

●主の祈り

一連の感謝（ユーカリスト）の祈りは、主の祈りで締めくくります。**聖餐によってみ国の祝宴を先取りする**私たちが祈り求めるのは、み国の到来です。ですから、主の祈りによって「み国が来ますように」と祈るのです。

●平和の挨拶

キリストによる赦しをいただいた私たちは、この世にあって平和に生きることを願っています。従って、この部分で会衆一人ひとりが、豊かで平和な交わりをお互いに表明しようとしません。欧米の教会では、この箇所では会衆が席を立ち離れて、周囲の人々と握手をして、にこやかに挨拶を交わしている光景をよくみかけます。日本の教会でも取り入れてうまくいっている教会もあるようですが、導入はなかなか難しいようです。いずれにしても、式文にある司式者と会衆の応答だけでは、平和を十分表現できていないのは確かです。

●アグヌス デイ （神の小羊）

アグヌス デイは、8世紀初頭にローマ典礼に入ってきました。パンとぶどう酒の形をとって、現在（現臨）してくださるキリストを迎えて、礼拝者はヨハネ福音書1章の洗礼者ヨハネの言葉を唱えて主を讃えます。

●聖餐への招きと聖餐

ここでパンとぶどう酒が配られます。

●聖餐の感謝

聖餐の恵みをいただいた感謝をささげます。詩編136編1節を用いて唱えます。

(5) 派遣の部

●ヌンク デイミティス （今こそ去ります）

ここでは、ルカ2章のシメオンの賛歌といわれる歌を歌います。パンとぶどう酒をいただ

き、救い主イエスに出会った礼拝者の気持ちは、生まれて間もないイエスを抱っこして、言いたい喜びに浸るシメオンのうちに見い出すことができます。この大いなる喜びを受けて、私たちは再び社会の現場へと遣わされるのです。

●教会の祈り

いよいよ礼拝が終わり、社会へと向かう私たちは、ここで頭の切り替えをしなければなりません。神との豊かな交わりをいただいた礼拝者に対して、神は宣教という働きを託しています。この世という私たちの社会は、さまざまな問題を抱えた、いわば宣教の最前線ともいえます。**教会の祈りは、そういった私たちの中にあるさまざまな現実的な問題の解決を、神に祈り求めることです。つまり、とりなしの祈りです。**礼拝者である私たち自身が、その課題のために遣わされ、主の宣教の働きを担っていくことを自覚するとともに、その働きを主が導いてくださることを祈ります。

●祝福

礼拝の締めくくりとして、神の祝福の宣言を受けます。私たちがこの世にあってどのような境遇に立とうとも、神が私たちと常にともにいて、導き助けてくださるという確信を与えられます。

●終わりの歌

神をもう一度賛美して礼拝を終わります。

7. 司式者の役割

●全信徒祭司性

司式者の役割について論じる前に、ルーテル教会では誰が司式者なのかを考えてみましょう。通常、司式者はその教会の牧師が務めています。そういう光景を見慣れてくると、礼拝の司式は、牧師がするものと決めつけてしまいがちですが、そうではありません。

前半でも述べたことですが、ルーテル教会には「全信徒祭司性」という考え方があります。これはルターが示した宗教改革の大切な原理です。「キリスト者の自由」の中でルターはこう述べています。

「さて、キリストは栄誉と品位とを備えた初子（ういご）の特権をおもちになるが、これをご自身に属するすべてのキリスト者にも分け与えて、彼らもまた、信仰によってキリストともにみな王となり、祭司となるようにしてください。聖ペトロがペトロの第一の手紙第2章9節に『あなたがたは祭司的な王であり、王的な祭司である』（ルター訳）と言っているとおりである。」

ルターは、このみならず、彼の生涯にわたる数々の著作で、この考え方を述べています。キリスト者は、おしなべて祭司だということです。教皇であろうが一人の信徒であろうが、等しく神の前に立ち同様に祈ることができるというのです。

ですからルーテル教会の礼拝において、司式者は決して牧師だけでなく、すべての信徒がその務めを受けもつことができるのです。

●祭司と司式者

この原理を、そのまま私たちの礼拝に当てはめて考えようとしなくて、今日の教会秩序の中でこれをどう取り入れるかということが大切です。そのとき、まず考えねばならないのは、ルターがいうところの祭司と、私たちがいう礼拝司式者の区別です。

ルターは「キリスト者の自由」の中で祭司の務めについてこう言っています。

「祭司の務めは、われわれを神の前に出て、他の人々のために祈るに値する者にすることである。神の目の前に立って祈るということは、祭司以外の誰にも許されないことである。」

「他の人々のために祈る」、「神の目の前に立っている」ことは、祭司だけができることという表現からすると、ルターが描く祭司像は、旧約聖書に登場する祭司に近い存在といえます。神殿で犠牲をささげて神に祈る祭司は、そうすることで神と人との間に立って、両者の執り成しをするのです。仲保者としての働きを担っていました。

キリスト者にとって、仲保者はただ一人、イエス・キリストです。イエスこそが私たちと神を執り成してくださるお方です。ヘブライ人への手紙は、イエスのことを大祭司と呼んでいますが、ルターがいうところの全信徒の祭司性を、ユダヤ教の序列にならって大祭司イエスと連続すると、理解することはできません。なぜならば、イエスとキリスト者の間には、仲保する者とされる者という明確な立場の違いがあるからです。

以上の点から、全信徒祭司性でいうところの

祭司と、私たちの礼拝の司式者は、区別する必要があります。司式者は、たとえ牧師であっても、また信徒であっても、神と礼拝者の間をとりもつ仲保者ではありません。

●司式者と司会者

次に、司式者と司会者という二つの務めを比較してみようと思います。ここで司会者というのは、なんらかの会の進行役のことです。司式者は礼拝の進行役でしょうか。礼拝が、始めから終わりまでつつがなく執り行われるよう配慮することが、司式者の役割でしょうか。決してそうではないことは、ルーテル教会の礼拝を経験している方ならおわかりでしょう。

司式者は、礼拝の中でいろんな行為をします。次に歌う賛美歌の番号お知らせ係ではありません。説教者を紹介することではありません。あるいは「祈りましょう」と呼びかけるだけでもないのです。

司式者は

- 式文に従って、みことばを告知します。
- 会衆を先導し、ともに祈ります。
- 会衆を礼拝共同体へと整えて、礼拝する民を一つにします。
- 聖書朗読というみことばの奉仕もします。
- 聖餐式と洗礼式を執行するのも司式者の役目です。

ルターが掲げた祭司の七つの務めのいくつかがここにあります（LAOS 講座「信徒として生きる」12頁参照）。

こういった大きな務めを**司式者（祭司）として担うためには、それを全うするための訓練を必要とします**。また一つ一つの行為についての理解を深めるために、**学習も欠かせません**。訓

練と学習を積むことで、司式者としての心構えと技量を身につけることが求められます。器用な人ならば、何回か礼拝に出ているうちに、そういった訓練や学習をしなくても司式者の語り方や間の取り方、所作を見よう見まねでできるようになるかもしれません。しかし、**語りや所作を模倣してできることと、その役割を自覚して責任を持って遂行することには、大きな隔たりがあります。**

●聖礼典の執行

これは、司式者の役割の中でも、特に責任が重く重要です。なぜならば、聖礼典は、それを通して神が直接礼拝者に働きかけてくる行為であり、これを中心的に取りはからう責任が、司式者にあるからです。全信徒祭司性という原理があっても、按手を受けていないキリスト者がこれを取り仕切るといえるのは、明らかに通常のことではありません。信徒が司式者として聖礼典を執行する場合には、そうしなければならない正当な理由があるはずで、例えば、ルーテル教会式文には、緊急の洗礼用式文があって、その指示書きにはこうあります。「牧師を招く時間がない場合、すべての信徒は緊急の洗礼を授けることができる」。そして、速やかに洗礼の執行を牧師に報告することを義務づけています。このような、秩序と教会内の承諾があつて初めて、信徒による聖礼典の執行を正当とみなすことができます。

●祝福

礼拝の最後の祝福の宣言も、按手を受けた者に委ねるべきか、そうでないかの議論があります。ルーテル教会式文には、聖餐式の場合同様、信徒による祝福については言及していません

ん。

以上のことから結論づけるとすれば、**司式者の役割は、神と教会の委託によって上記の務めを責任を持って執り行うこと**と言えます。



8. まとめ

●牧師と信徒の共同

今日、信徒の宣教活動への参加がますます必要な時代になってきました。それはなにも、礼拝での働きに限ったことではありません。これまで牧師に任されていた牧会行為全般についてもいえることです。こういう時代にあつてこそ、全信徒祭司性という教会原理が生かされるでしょうし、あるいはまた、どこまでそれが有効であるかが試されることになります。牧師も信徒も、等しくすべてキリスト者は、神と教会から、宣教という神のみわざを託されています。両者がしっかりとした信頼関係をそこに築き、秩序を守りながら、共通のみわざに励んでいきたいものです。

●礼拝を作ろう

牧師と信徒の共同が全信徒祭司性の持ち味の一つであるならば、それを実行する一つの大胆な取り組みとして、それぞれの教会で独自に礼拝式を作ってみてはいかがでしょうか。

私たちは、礼拝式文を変えてはならないと決めつけていないでしょうか。ルーテル教会の礼拝式文は、宗教改革時以来、そのまま今日まで伝えられていると思っていないでしょうか。たしかに基本的にはそうです。みことばと聖礼典をはじめ、伝統的なスタイルが受け継がれています。しかし、細かなところを見ていくと、地域によって、あるいは時代によってばらつきがあるのも事実です。ルターは二つの礼拝式文を書きました。一つは、ラテン語で大学や教育機関用に、もう一つはドイツ語で、これは地域の教会での使用を考えて作っています。そして、この二つは、式の流れがそっくりそのまま同じ

ではありません。礼拝式は、それぞれの教会の実情に見合った形式であって良いし、また、そのように整えていくべきです。そうしてこそ、**宣教を視野に入れた礼拝作りといえるでしょう。**ルーテル教会式文の礼拝式には、いくつかのオプションがありますので、その中からの選択も可能です。主の祈りや使徒信条を文語訳から口語訳にする、子どもたちとの合同礼拝、古典的な賛美歌だけでなく、アジアやアフリカの賛美歌や、現代風のワーシップソングを取り入れるといった試みは、すでに多くの教会で始まっています。教会に、作曲の賜物をもつ信徒がいれば、信徒による作詞作曲の賛美歌を歌ったり、式文の中で歌うメロディを独自のものに変えてみるなどというのはどうでしょうか。

言うまでもないことですが、こういった試みを、牧師一人や役員会だけで決定して実施するのではなく、**信徒レベルで十分に話し合い、良い点悪い点などを検討しながら、最終的には教会全体で承認するというプロセス**を取ります。そのためには、**教会全体が礼拝について学ぶ**ことが不可欠です。**礼拝を作るということは、とりもなおさず礼拝を学ぶ**ということです。礼拝の学びなくして礼拝に手を加えることはできません。教会全体で礼拝についてともに学ぶという経験が、信徒一人ひとりの礼拝生活を結果的に豊かにします。礼拝の意味を、信徒がもっと深く考えるようになります。一つ一つの動作や行為に対して、おごなりでなく、もっと心がこもるでしょう。そこから、教会全体が宣教活動に積極的に取り組み始めることでしょう。

・参考文献

松本義宣「礼拝の法は信仰の法」日本福音ルーテル教会・
西教区、1996年

前田貞一「聖卓に集う」教文館、2004年

越川弘英「今、礼拝を考える」キリスト新聞社、2004年



LAOS 講座 第1号 礼拝の意味と実践

発行日 2004年10月31日
編集者 PM21 第2プロジェクト「証し・奉仕する信徒」委員会
委員長 齋藤未理子
著者 浅野直樹
発行者 「日本福音ルーテル教会宣教方策21」(PM21) 推進委員会
宣教室長 推進委員長 徳弘浩隆
発行所 日本福音ルーテル教会 宣教室
〒162-0842 東京都新宿区市谷砂土原町1-1
電話：03-3260-1908 FAX：03-3260-1948
e-mail mission04@jelc.or.jp
印刷所 精文堂印刷株式会社

